

---

# やさしい幽霊たち

kazuya

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

やさしい幽霊たち

### 【コード】

N9256B

### 【作者名】

kazuya

### 【あらすじ】

僕は病院で『やさしい幽霊たち』と出会った。

## （前書き）

小説のアイデアはすぐに思いつくんですけど、それを作品という形にするのは難しい。

そんなことを思う今日この頃です。

今回のお話の舞台は病院です。

今、僕は病室にいる。窓からはもう嫌になるくらいの清々しい空が広がっている。どうしてここにいるのかはわからない。でもおそらく、助かったからだ。でも僕にとってそれは必ずしもいい意味ではない。僕には目的があった、だから古いビルの屋上から飛び降りたのだ。そうだ、こんなところに寝ている場合じゃない。しかし、少し動いただけで体中に激痛が走る。自分の体を自分で動かすことのできない苦痛を感じた。だめだ、何もできない。すると病室の扉が開いた。医師が僕のベッドの近くまで来た。

「気づきましたか、記憶はありますか？」

すべて覚えている。一瞬間に浮いたあの瞬間まで。

「良かった、体のほうは大丈夫ですよ。まあ、あんな高いところから落ちたので、すぐに完治とはいきませんが、この病室でおとなしくしていれば良くなります。リハビリも必要ありません」

僕は運がいいのだろうか悪いのだろうか。

「とにかく安静が必要です。今は動かこうとしても動けないので心配ありませんが、少し動けるようになったとしてもあまり無理はしないように」

何も返事をしなかった。この体が自由になれば、僕はまた空へ向かおうと決心していた。

とにかく体が動かない。まずい病院食を取り、とにかく寝るといふ生活はもう二日目から嫌になった。

三日目、朝食を食べて、やはり少し寝て、目が覚めると知らない老人がベッドの横のいすに座っていた。寝ぼけ眼で目が合うといきなり声をかけてきたので、びくつとした。たぶんベッドから何センチかは浮いただろう。

「怪しいものではないぞ、私は鈴木という。君はまた同じ事をしよ

うと思っっているだろう」

同じ事って、僕の噂はもう広まっていたのか。いや、ビルの屋上から落ちた情報だけでもなんとなく想像できるか。でも僕はこの老人を無視した。見知らぬ人に説教を受けたくない。しかし、老人は続けた。

「わしはもうこの歳じゃが、この世に未練がある。人間はいやらしい生き物じゃ」

この世ってこの老人は最期にさしかかっているのだろうか。

「君はまだ若いだろう。自分では大きな決断をしていると思っっているだろうが、こんな人生序盤の一時の感情でこの先の何倍もの人生をなくすことになるのだぞ」

老人の言葉はやはり説教じみていた。僕の気持ちが変わってたまるか。心のなかで反抗した。そのあと、老人は声のトーンを優しくして言った。

「逃げればいいじゃないか、好きなだけ。現実逃避をすればいい。この世と分かれようという考えよりはいくらかましだ」

僕は変わらず心の中で反抗を繰り返していたが、それなのに自然と涙がこぼれていた。

「そうだ、ひとついいことを教えてやろう、何か悩んでいたとしてもこの世にはそれと同じことで悩んでいる人が1000人はいるといわれているんだよ。あれ？1000人だっけ？」

この老人はいったい何なんだろう？

深く考えるより先に自然と言葉が出た。

「ありがとう」

老人は優しく微笑んで立ち上がりどこかへ去っていく。

そのあと僕はベッドの中で泣き続けた。しかし、僕はあの老人との約束を守れるだろうか。

翌朝、僕は看護婦にあの老人について尋ねた。すると、

「鈴木？入院患者ではいなかったと思うけど。最近は何聞いてない苗

字ねえ」

そんなはずはない、僕と同じこの病院の服を着ていたし、夢だったのだろうか。

それからしばらくたった日の朝、僕と同年代くらいの女がいすに座っていた。

「おはよう」

僕はまた夢かと思いながらも軽く頭を下げた。

「鈴木さんにあつた？私もあの人と一緒によ、名前は佐藤」

何が一緒なのかわからなかったから、また無視をしようとしたが、

「そう、入院患者でなければ、夢でもないし、不法侵入者でもない」

「つまり幽霊なんだな」

女はうなずいた。そんな感じはしていたが非現実的であるような気がしていた。

僕は手首に注目していた、これはひどい。

「私はやっぱり後悔してる。今のあなたには言ってもわからないと思うけど、昔の私にそっくりなんだもの」

いや、僕は少し考えを変えてみようと思ってるんだ。あの老人の話聞いてそう思ったんだ。でもまだ不安がある。

「ばかね。鈴木さんはこういうことをいいたかつたんじゃないかと思う。人生を進めていけば、大抵のことは乗り越えられるってこと。今の私がそうだけど、なんでそんなことでこんな行動に走つたんだろうとかね。実際どうでもよくなっちゃうのよ。今こうして振り返ってみるとね」

「君にそんなこと言われるとはね」

「だから言ったでしょ、後悔してるって」

女は微笑んで言った。

「悩みなんて本当はちっぽけなもんなんだよ」

翌朝、看護婦に昨夜の女のことを聞いてみたが前と同じような答えが返ってきた。

まさか幽霊に説得されるとは思わなかったが、今まで僕はいつも一人で悩んでいた。恥ずかしくて誰にも相談できずにいた。でも今はなんだか安心感で満たされている気がする。

あんなふうに僕に言ってくれる人、いや、幽霊に出会えてよかった。

明日退院できると医師に言われた。体はもちろん、心まで元気になったと思う。

退院の日の前夜、最後の訪問者がやってきた。僕と同世代の男だった。

「退院おめでとう、僕は中田というものだ」

この病院にはやさしい幽霊たちがたくさんいるらしい。もう恐怖はない。

「君にお願いがある。これから普段の生活に戻るだろう。もし前の君みたいに悩んでいる人がいたら助けてあげて欲しいんだ」

「助ける？」

「君の言うやさしい幽霊みたいにしてあげればいいんだよ。人は一人では生きて行けないことがわかっただろう？僕も生きているうちにそんな幽霊に出会いたかったなあ」

「じゃあ君も？」

「君と同じビルから飛んだんだ」

少しの間、二人とも無言になった。

「誰にも言えなくてさ」

僕はなんてばかなことをしたのだろう。

「もう朝だ、これから僕の方も生きてくれるかい？」

僕は首を縦に振った。涙で声が出なかった。

「それじゃあ、約束だよ」

僕は結局一睡もしなかった。でもこれほど清々しい気分になったのも久しぶりだ。空もあの日と同じく清々しい天気であったが、あ

の日とは全く感じ方が変わっていた。僕は助かった、それは間違はなく運が良かったのだと今ではそう思える。

「退院おめでとう、ここに来たときより表情が良くなっているよ。」  
医師が病院の入り口でそう言った。看護婦の話によると心配して  
いてくれたらしい。この場で幽霊の話はやめておこうと思った。

「もう大丈夫かい？」

「はい、お世話になりました」

僕は看護婦から花束をもらい、一礼をして、この不思議な病院を  
去った。

みんな、ありがとう。

「院長、良かったですね」

「あの少年はきつとこれからも大丈夫だろう」

「でも役者を幽霊役にして説得させるというのはやりすぎのような  
気がします」

「そうかもしれないな、でも結果が良かったんだからそれでいいじ  
やないか。鈴木さんと佐藤さんにはお礼を言うておくことにしよう」  
「私もあの少年にそのことについて聞かれたとき、びくびくしてい  
たんですから」

「それは悪かった。でもわれわれが説得するより効果はあると思っ  
たんだ。どうしてもあの少年を行動に走らせてはいけないと思った  
もんでね」

「息子さんもきつと喜んでいると思いますよ」

「そうだといいな」

「さあ、次の患者さんが待っていますよ、行きましよう、中田院長」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9256b/>

---

やさしい幽霊たち

2010年10月8日15時21分発行